古經文體

八之九

へ 5
4709
5

へ5
4709
5

嘉業堂
軒
文庫

本朝文鑑八

贊類

淨土和讃　幸西門下町賛　空門前賛　空門後賛

我枕讃　菫帝賛　負讃　負讃

鮫柱自讃　讃ス徒然讃ヲ

銘類

花桶銘　摺本銘　著茶銘　旅硯銘

古硯銘　硯銘

昭和九年
青山堂
小田野氏
長男左右
記氏寄贈

賛類

浄土和讃

親鸞聖人

彌陀ノ名号唱ヘテ信心ニコトニ得ル人ハ憶念ノ心常ニシテ仰恩報スル思イアリ祈言願不思議ヲ疑ヒテ御名ヲ称スル往生ハ宮殿ノ中ニ五百歳住シテ過トフ説給フ

往云此讃ハ建長二年三聖人八十二歳ノ御作ナルカ和讃ニ帖ノ中ノ要文ニシテ一部ノ大意ヲ知ラシメ給ヘリトソ但シ憶念心トニルハ仰ノ他力ヲ忘レサルトナリ誠ニ文章博達ノ家ヲ出テ愚禿ノ二字ニ一字ヲ建給ヘル本ヨリ安心ノ法門ニテ王侯貴人モ自己ノ智能ヲ慢ク

張ニ本ヨリ他力ノ恩徳ヲ忘レンヤ仰法ハ總テ不思議ノ法ヲ疑ハス深ク信シ高ク称セヨトナリ

卒兎園小町賛

芭蕉庵

あるときはくるしみをうけ苦をもうけ
人のかなしみをうけ人のなやみをうけ
今ここに現ずるものかなしみあり
苦をもあんじ苦をもあんじ
ときはもとめ
往云此一篇ハ短篇ナカラ六箇ノ尊字ヲ用イ六箇ノ義

等ヲ用テ然モ其句ニハイツクケタル点ハ異ニシテモ異語トモ
古樂府ノ体ニ似タラシヤ但シ此賛ハ湖南ノ弋陀亭ニ在リテ
其編ハ江井ノ定光坊ニ在リトフ

三玉川前賛　僧文章

唐の奉を虚うん花ふるやこけるおもて　王摩詰ゑがきたる
輞川の圖とおくるものありやそのくさとして花
もとちらくとひらくとをあきらかにしるべし
ちりのうに仏をこれにやうてはむらくもえも
いはをまもる王維ゑがきたるものなれば

よあるとおもふとく病もとこしなへにあらくあるいはとも
家又洛下の風土百九の名ふる三玉川の圖にして古
奇人ちりちりに近きをめぐる官士遠人の廉潔
を一紙にあつめて中ちはわれをこそひかれ
ふひと歴て煙霞の眸とうるおるにはるる比
ゆうぶんとおもうて行とい盃中さあたらしかれ
風景又一向と訓ずるとをむ野信を常とおもさ
の病ちりて遊方行脚の杖とひきされ三川の川波の
底一とうふ孤又仮又ふるるあり何ゆへとしらえて
とも竹窓の灯ひ一けんなの品吹の音を

とかくするに彼伊勢の人にとひけるに一里ばかり向の
杵のけはしさかんと云人のよみし月見の歌あり此風土
峰あらしをさそふ所をたどりし野の奥の宮居なりて
ことのはしもさらぬやうにおもふをかしきにも思ひ出し
むかしに一峯万里の志をまして立なから天の国のうつし
まことにいさゝかのゆかしかれ中にも野路の玉川に
錦あやなす土壌あれは物ちやうのうたのかかれの遠人
よするひめんの竹流詞にて行きてふるきたのはかなき猿川
とて不なかりて西より流れてるとて玉川とは中に作る人
ぞれとて八百あやめのたんの膳所の住人にて向井氏同編

とこふあかつきのこのみにて立寄て其秋とおもふく 梅竹
侍りとや雲のあとに着ける化の地の山をふる谷の 松竹
其のぶくにしくかてさて境ちうく風致の人すなりてつき
よしに水中の蹄をしめしより外かにつみ今を一巻の玉川に
来る人の吟膳をかりて巻さとん かの所をあしらひそ 華水
ふしまろし

六玉川後賛　向去来

田中の山中よりさる不おるく松村野路市の名はなへくふ
うちねは玉川のまわりは六川よりかのもろゆしきと唄ひまさとて

人の見てたのまれハ我その名の芸をやゆかしくなれバ人を和よ
よりて玉川かーく和た人をとゝめてあゆかゝへし玉から玉と
玉とよふらんの故あり靭負(ワキミ)百九子をとゝもえ布や
又よ井手の玉川を詠よ山城の嘆みられて也そ黄玉
並かゝハ玉と金とを云かかれ此玉川なり次をいゆの也
垣の白露よえんて中あをおけるも此河内の冨の園より
津の国まて暗そ花美れる里玉川なりしまむさし
野の玉川を渉もて調布の塩らくし漂れあへ玉川
あり野路の玉川をかのわしきをひよう入秋のうかに
陸奥て色ある月の玉川あり此の五にも川の清涼り

そんそ又須のちらりゆしりて吹あはせられて凡よりてなれ
るの玉川あり萩をえ了り高野の奥まて旅人のわりし
かまれてもや汲や紛んと大師のあかれもよひまう衣の
二三れ玉川ありりや人ありて御言のきこしうなさて
いつて玉そ下和ら笑をきられて蹤ひふこうきもよし　えなし

注云此賛ハ蘇子カ赤壁ニ效イテ前後ノ二字ヲ首ニ題セルハ
但シ選賦ノ循筆トシルヘシ去レハ前後ノ両賛ハ洛ノ鳴堂
ニ在リテ前ノ賛篇ハ遙去ノ法ナリ後ノ賛篇ハ頓挫ノ格ナリ
誠ヤ蕉門ニ去来丈草アリトハ此等ノ文法ニ頓憾ノ三教
ヲ傳ヘヌル随類得解モ貴人ノ古文ナランカ前ハ只一二六川

ノ題ヲ撰ビテ六題一賛ノ菓水ニ詠ヲ結ビ後ハ遠ニ玉ノ
意ヲ起シテ跋ノ一字三字下ノ詞ヲ残セル二首ノ趣意ハ
分明ニシテ前篇ハ以テ起結ヲ又ハ一ク後篇ハ以テ虚實
ヲ知ル人シ但シ左ノ草ハ尾州山ノ武士ヨリ五十年ニ禄ヲ辞シテ
僧トナル故モ堅固ノ道心トソ

我枕讃　　波之東伍

我枕ときき尾の森見るもあるとて伏ものの
ふるくまいりてまのあたり秋の夜ふけて寄れば
ねとろくに情を遠寄の面とかうむり所実ハ多
のなるやはらかいに寄ゆるの伏れと枕とまとふも
あれと制まれらひくまにみも拾て伏ものなれ又秋夜
よくしむかうを富のたを宝の雨夜ふ安枕ゆめよる
をかくよとまりとかいをかの空ひいまくあるとつる
枕ものなくあるれをしにられた枕の寄ものとえるあ
天鵝絨の枕を地をあるまくまくを枕の最上あれとあるは
大名の居宅の作をれ枕を掛ものの棚とまくり
やうけれと洞をはやうあるを妹ふりはかれて
くるのふの人をあるまくれ移やのくらくよ
まくくくして女子の宮の猫ふるまくまくしふく弱る

ころ一夕気の毒れ化ねらやしおうしけてしも夢のさめし
あさき旅ねも離られし枕のこゝろれねねら一夜やすら
の月又むつるまゝけるを枕とするなり 雲運庭山の木履
もちもまた白き臥人の駒草よりも第五る枕の名は
あかなくしけらし枕の名をあけてたられ好雲を空
ひろにあるを夏熱からしとや いろなら許の古のへなむ
伊ちと来秋世の名よりゆるれりと之錦の作許りと申し
きさし庵生ら夏の枕なく完の世界又五十年の今日はとぞ
又て夏と人間の草むしとつ秘そたれての草庵を
さまれて病をさまでくる使なるとやあるは帝中の十聲

まくらに夏の里のあはれもかけ硯の筆のかゝり枕又は虚
お坂と新かねぞろんも哀来のかゝるあく入るなと庵山
のあまよ土竈(リト)の火を焼ならり出吹けて頭をもへするる
これ世をかりの枕をもてなすとなけること味深の胴欠陀
眠らの錦又まとたきん人の心れあき枕ならや作
よ枕を安くまれて斉よむ人の徒をたくし夢まろの
んとさくにもあるこおとあし肱枕のかくとて論語とやら
さかれるもあやしけれと第あの膝枕は源氏物語よ
やりけて世の人のまとふまなる所あるそ枕なまれ
有し鳥(ニハスマデ)ゐのよられ枕詞を云ふし一りのまうせる

ふれんふ〳〵てのくれなゐ
と連音作ふ〳〵そ用ゆるふ〳〵
そふ〳〵ふのそそのはの用ありてふ病の人のそふ
そ称ふ〳〵しけ花〳〵ふ〳〵て一芝ふ事近の中の上ふ
一蓮托生のちふうとふ〳〵

任云北讃ハ全ク俳諧ニシテ先ハ我枕ノニヨニ題ノ意ヲ尺セリ
去レハ春ノ夜モ秋ノ暁ヒテト長短ノ情ヲ二句ニ縮メル筆
力ノ自在ヲ称スヘシ次ニ天鵝絨ノ枕コリ大名ノ隠者トハ
名言ニシテ姉ノ段ハ一篇ノ筆占リ先ヒハ歌舞ノ雨ノ
詩コリ我朝ノ膝枕ニテニ十二首ノ故実古事ヲ用ルニ

勝ニ劣ルト云ハル古人ノ文章ニ過タラン事シテ枕ヒ山石
ヒヨノ詞三蓮ノ儒ヲ含メル意ヲ俳諧ノ筆枕ニシテ
一蓮托生ハ文ノ風實ト知ルヘシ但シ作者ハ大野木兵衛ニシテ
別姓ハ伝藤ナルカ加納ノ城下ニ在ナカラ荘子ニ隠故ノ志アリトカ

董帝賛

鉈碧石川

世ヨ神農の像と云ひて醫者の家ふかくふるふ
なのかくられ野性ふるふんふ百ふまとふもふふ性ありて
文質林々ふれふふ一ちれと病のふるりと伝ふて
人と伝ふふふ伝あんふ董帝の内経と称ふて一ふ

かの豆天の圖をゑかきて我家に傳へけるやうなれと北
摸様のきはしくまくあの詩もありしかれとありけるとぞ
畫師の筆を加へて誠にその圖となるに龍の髭鬚
を六尺のあはれをそへさる傳へ世にひろまりけり而して
も中には作られて奇なりとて出し此圖を彼筆を
さしむるへき所にしこはきをひけ作る畫にあるにと
おもくもてはまた人をかくにあらはれけるにこそ
かきあるへありしと新して曰此の夏人に遍ねうしてなり
より信をうるてきたるへく天年を經て死さて一ト家
之善の書と傳て一しとあるへからてと傳りし也

此帝作りの醫術ありしかはその壽も作らるゝと
いひて醫案の術も傳りて修養の法など記したるをも
ある人作り二論と記して曰むかしもある人作りて鏡（ウキ）を
そのゆかに此物ありて形を畫かきたるとたとへ作し
右とならふしてひくきを作りまもて伸ありけれは錬り
のやうて此とたとへあれてありしもて天上をもしるありしもの
畫をも此論の作るをまもりしさにいつとなく天下のものとりて以て作り
黃帝の有画を一流として一しとなりて是を論替の數とし
あして陳思らぬとも世に傳へける
往云此賛ハ一体アリテ古文ノ所謂ル論替ナリ此故ニ醫家

ノ掛物ニ封シテ暫クニ皇ノ德ヲ論スルニ似テ實ハ擬様ノ新
古ヲ云ヘルナリ然レハ豈天ノ無ク有ナル牛鍾ノ靈無ナル
例ニ屈實ノ法アリト称スレ況ヤ固ノ或人ニ古来無擬
ノ或人ヲ望テ誠ニ文武ノ論ヲ曲折深遠ノ体ヲ
尽セリ去レハ作者ハ山田氏ナルカ別姓ハ鉈尾ニ濃ノ上有知
ニ住ス世以テ聲ヲ業トセリ陳思ハ其家ノ領ヨリ
但シ上有知ヘ順カ和名ニ云ル有知ノ里ノ上邑ナリ

貪讃

鳥居人

古より富るものを世のことわりとやん為ま

貪のあ撰山にかくれて貪ふ事の苦しきあるに
地ちかく山畑うてあるよりくゝ乳ほ
今をさらもせんあるん竜蕗の子濃り柳と
乳とくやふ家よとちまるれの加し拾屋のこゝろと
たうゝそうたへたのてふとなまるあんゝ乳とたれ
無の四苦あるゝそれを拾ゝかゝて辛ふきをう今
ゝゝゝゝ苦の化念とふしてゝ行くゝ家よゝ乳と
たちゝひてたの貪を乳ゝ乳ゝあるゝうゝ行て弟山の
乳西をあるゝ伊仮といくゝて乳上りゝの間ゝ様ゝ
あるりを晴好雨奇の呼ゝあるゝあるゝ拾風

清月の情をはくみて孤をなぐさめ松をあくしん
いうてやうとそのふくらさ貪とそのふかさと
世をまこと貪とそのふくあくをもくしかをまち
手端の和とはむへしはかりはかりの用を清をむを移り
静坐をまこひあくに業を拾に出をはをしらん

貪讃讃　東花坊

世に浮屠十郎ら調しをも貪を語るの法
あんしはらを世をあるくらい世をあるくとうやう
そうへ所をまんるとそのふくをまこと貪とそをん

はれくれよに世の中はとをして一筆一朝の紙四を絵
釈迦をまこと世のわれとをしてを食に味の世に業と
歴をまこと貪をいをまこと世をあるくをまをあるくをまを
とをしてをのふくをもこれをまれ絵をあをくをれてを
西をむをひをまをまをふんをまをふくをまを儒仏の根と
和をとに世をあるくをしを世をとをあるくを富をとをの付を富を
あるくを貪をまを貪のかをまをあれをあんをくをしを世をと
をまをはくをまを貪をとをのふくをまをふくをまを一次を富を
あをを貪をまをみをまをはをくをまを貪をまを絵を富をまを
をまをふくをまをを絵をはをまををまををまををまををまを

清月の情とはくて孤さとも称とるべしてん
いうてやうとそのひとをさ貪とそのひとと
世をさ貪とそのひとあるくてもく師年ぶまちて
手端の功とはむ一はくの用と清とむと称り
静坐をさひあるくの業と称と世とはちん

貪讃讃　東花坊

世を厚曹秋十郎ら調しても貪を諸々の法法
あるしはくらを世をあるくらり世をあるくとをやう
そうへ所をさんとそのひとをさ貪とそのひと

はかくれこの世の中はとて一第一無の孔四と称
釈迦をて貪をいさ世のわれとて食と味の世と業と
とをそのひとをやこれは師説とあるをられて
西をむらひをさをふん貪をおりて儒仏の根と
わとは世をあるくり世とをとて富とそのひと富と
あるて貪をと貪のかをらあれをん人りは世と
をりはくさに貪とそのひとをひとをひ一は平富と
あて貪をみをひとをくを貪をを称て富をみをひと
をあり世をとをて所をはゆををををはをのをし

かんしうの文をあたへけるに、
ふあるてたのもしうもとめ牛をいとひとのねい惟基し
ゆるる人を彼の擬字ふるまひをひうちそよ金の
宗とたまうちて妬を文字の宗と頼とかうふけ
ねる祥氏の宗と眼とはうちて妻よとちん
はしふうう布有のおのとうあうきかれて
はをのあをひうきうきて博奕のはのくとうき
うしよ金の不帯をなるうけちんはうて
毫を赤土の船とはうて西のほへ行るはしはもて
とけの氏の人のねしきうゆあるおまうちに

雑魚を赤土のううて木松と帯をうくくしはうう
とうてはうん行ひきの境界ふう天宗を宗
耀の松をうれはうてかのようぬの宗をあのあう角
うけはのくをけ加をもをうれうれうねい
きうくく金のふとはうんはくくの浦くとをうう
うひうちのふくとかをきうて夷うちはの宗
きうう蘇の松をわ角のをとひうくをううの松を
主孫の祇をきうて紫古貫の国守もかの牛
ふうをきう富士川の船ひをの惟基ふうをう
きうふうけはあうて直門のをうをねうけう

[illegible]の滅れり仏法はさて世ふる
のあり意[illegible]ひ四[illegible]一と称つの自接
[illegible]れ紅明[illegible]の人とあ[illegible]仏法
[illegible]和[illegible]の体相と[illegible]滅明
和尚と名[illegible]れ諱[illegible]の文字といて[illegible]生
[illegible]趾[illegible]
仏を不[illegible]の凡類僕[illegible]
人[illegible]
のお[illegible]比の所[illegible]と[illegible]
[illegible]の所[illegible]疑一決の[illegible]

仰[illegible]の法[illegible]儒[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の貪[illegible]
[illegible]
貪福の論[illegible]
[illegible]
後篇ハ文竹ノ名言ヲ讃ス去ル北讃ノ発端ニ曹戈ノ詞
ノ若輩ナルヨリ高ク儒仏ノ至論ヲ千七ル例ニ仏諸ノ筆格
ヨリ例ニ虚竇ノ自在ヲ見ル一ニ或ハ関字ニ舷頭ノ一対ハ

西行ニ天竜ノ伊ト知ルヘシ或ハ滅明和尚トハれよモけ人ノ貌ヲ見テハ鉢坊ノ如ク思ハレンニ和尚ノニよハ勿躰ヲ云ヘル是ヲ双眸ノ文法ニシテ他ノ凡ハ十ル筆力トリ宰我モ滅明モ家詞ニけ文アリ然ルハ北公扁ニ抑揚ノ法アルハ結語ニ例ニヨリ人アラントハ世情ノ讃詠ニ及ハサン謂ナランむモ此讃ノ興味ヲ見レハ先師モ各ノ其ナルハ惟然ト同年ノ作ナヘシ但シ惟然ハ義農ノ素生ナリ

敢柱自讃

敢たゝらて爰のゝけ〳〵かゝる色
むゝ一ちふてのほ格を過去らしも現在よりかり

蓑其角

けま未とゝりて曼郷ノ入ゝそゝゝゝ穴窮の
ほうひとちるゝ

往云北一三軍ハ濃ノ東南ニ在リテ扉風ニ自筆ノ色紙ナリ然ルヲ四子ノ題名ヲ加ヘテ例ニ選場ノ淘色トナセリ去レハ定家卿ノ云ヘニ春ノ夜ノ景ノ浮橋トタヘシテ峯ニ別ル横雲ノソラトハ無心所着ノ所ニシテ此卿ノ風格ハ千吟万詠ニ比体ナルヲ吾ナモ一生ノ名ヲ学ヘリ故ニ彼カ例諸ニ世ノ耳ニ落サルモ数多アリテ是ニ辞世ノ句ニ至リテハ富ノ暁近シキリくすト云ルハ春ノ暁ニ秋ヲ思イ寄セタル誠ニ命終ノ哀ニ未ノ未ノ未トハ是ヲ云ヘシ但シ其角ハ武陵ニ遁放ス事ハ彼ヲ隠

讃徒然讃

江北房

世に伝れくるものいつるを関白良基公の吹嘘ものねを伊予入道とてくもられ當時の寺家院のおとゝれて二百四十四段ゝ一部くゝ
伝をれ侍りしかゝ法名連化ゝ儒仏老荘の説ことゝれて仏教の人なれとも法花経の
ゆゝしく無所ゝ思ひ入れの意を抑て
外れの情をたゝ中ゝかゝるゝ抑と書山
東華房ありて藤関白のゐ辨抄を作へ武陵義

の所説とかゝれくの讃九巻とゝれり首巻
凡例大綱より別録ハ園公賢の園太暦の説とゝ
或ゝ三条好の艶書の論とゝ或ゝ無好の説等
の地とあゝてこれくゝ古来の十五おゝ七尋八覧
の夏ふゝこと第の二百四十余段ゝ為辨太暦の説
とんゝんゝ毋てゝ抑れの折ゝとゝ海
ゝてゝれ此讃ゝ大意をゝてゝて大段ゝ四十九段
ゝてゝれゝ二段ゝ四ゝ子のゝと別十段ハ二百三十
七章ありゝゝ序文の和のゝより路説の笑のゝ
と讃ゝるゝ畢竟ゝ涅槃の一ゝ不説ゝてゝれ

一部を和文の法語につくりかへ和歌と法師の
一節より詩おのの人れまじりてそろひ例とする事なのか
情の抑揚褒貶とはたらきされて面のかたちにて
おもてに文理不到のあるを爲人無我のつもりとして
自己のそなはりとそなるあるべしたとへば讃の讃なる
不生如幻の句を賛して色を法とこの心一つのみなら
人を蓋陰をとゝ云ひ色を対して空のそなはるを蓋好
の宗法にして求をはるとも求らるゝ心もとゝ
こゝろのもとも求を是非と喜怒のこゝろを戒かと
儒仏のさとりも我を長者の一段と人と大欲とをこゝろ

ハはらハ好色の二ツよりかゝる一部の趣意を一帯とはぬる
て詞をなるれ風流にあるとも心を佛仏のなかる
かきりのこゝろ究竟理部のつもりとなて仏笑の二ツ
と讃者と讃を命ずるや
仏云此讃ハ徒然世ノ大意ミレテ文章ノ韻舞ヲ用イス
實ニ其讃ヲ讃ストヽ云ヘレ去レハ関白良基公トハ観應ノ
比ノ稼相ニシテ伊与ノ通ヨハ今川了俊ヨリ次ニ爲辨抄ハ
故禅閤ノ自書トヤ又兼冬公ノ奥書ニテ天文元年ト
アリ云ハ後花園ノ位時ナルヘシ世モ此抄ハ書ヤ三十廿三
年ヲ傳ヘストヽ又ヘタリ或ハ云賢ノ園太暦ハ全部百卷

ノ史書ナリトヲ其世ニ故アリテ減板ナリト其向ニ至ル所ノ
夏跡ヲ載スルニ延慶ノ始ヨリ應安ノ末ニテニ終テハ
四十年段ハナリトヲ然レハ此讃ノ趣ハ徒然ノ讃ノ本文ヲ
以テ其段ノ下ニ通明セサランニハ

銘類

花桶銘　離立甫

ひらくいとゆめとそらにもれ出るかゆめ〳〵こいしのそらに
のこりもれよいつとさらけ入めいとをもなん
ひらけかる花のうねとなてゝ世とまるらて
なんとあらしいとれきれ〳〵

犯云此一ツ命ハ花桶記ナリト或人ノ命傳ヘタルヤ其桶名ヲ
吉野山ナト云ハルニヤ然ラハ中間ニ有ノ名ヲ置テ前後ハ
序詞ノ業格アルヨリ実ニハ銘ノ一ツヨリ題セリ但シ此作者ハ
中比ノ俳士ニシテ雅トハ此人ノ家名トヲ

拍木銘　并序　藤如行

まねかれぬこゑにしたがひ拍木のあなたこちらやうち出せは
ものひろくて芸の道よりうれしきをけ為ふけ命
ときをれくとはくはかりやとられわれまくせの果報
もせ金ふるとやたもせ七種のゆめ命より出る仏乳供

のきつゝとかけちらり虜に定のをちかく月と知らねはし
芥子のをちか墨とそへられて難をよいう胡ニー
ちくすゝふれのんさゝに空を時ありかくて出すつる
此のいうそしさたまく茶の碍ちよかうくて器の古く
不ちりんとをれく僻く硯の袖をやとかれ或そ悟氣の
銕丁又物りいされて果ちを其所の料羅えとし
あるに大根おろしよらやられあるおい貝杓子の音よ
起て俗よりふすゝてけるよ雪をれちる比そとけしけ
ていとまとをゝまちのやうし新義より大宰の宗
の夕飯中をてと康そにぬるゝよく気をありかく指

うまきは口おしかれかゝる安は男界と屋よらりて
娼男娼女の藝様となりんとを尋ねまる所
家を下よりて江湖の僧と侶養ちとをすつ三千様
の統緒よあひて諸並大悟の曉よつさ俗ふんやと
をめら院服と挿をつりてけんとを施しける
俗しあれ不帯の箇文俗とて
松風のをるを峯よ守ゆら

注云此銘ハ此体ナリ本ヨリ如行ハ美濃ノ産ニシテ直経ハ近江膝
ナリトカ武名ヲ辞シテ浮流セシヨリ爰ニ発端ノ詞ヲ知ルヘシ
然ニハ此銘ハ其身ヲ歓シテ世ニ在ラハ誰カ汁是非ヲ道ヒン

トナリ去ハ世間ノ議ニ或ハ南禅寺トモ永平寺トモ大樹中木ノ
枯詞ナルヲ今ハ三十樽ノ起語トナセル例ニ俳諧ノ筆格ヲ得テ
蕉門ニ比作有アリト云ヘレ況ヤ其銘ノ酒ニ落ル渓ニ寒山ノ
詩風ヲ傳ヘテ爰ニ語無ノ暁ヲ云ヘルナルヘシ

著茗銘 并序

西華坊

蓑里ニ茶ヲ好ム僧アリ其茶ノ湯ヲ俳諧ニモ比レハ
茶人ノ風流ニヤ山林ニ住トモ市中ニ居ルトモ
トヽケ世人ニ尤ヲ求メ侘ヲ楽ムヲ俳諧ニ比ス白樂
天ノ詩ニ閑適ニ信ノ交ヲ深ク隠ルヽモ世ニ
遊ブヒトヽヲ忘レヌヽ如ク中庸ノ操ヲ守レルヲ
ハヽ茶ヲ用ヰテ茶ヲ点ルニ味トヽ香ヲ以テ一味
ニヽ蓑里ノ著茗ヲ汲テ西花ノ人ヒトヽヲ
分ツ塵ヲ捨テ分ツヲ宝トス今ノ茶ヲ人ニ
ハ茶ノ茶ノ湯ヲ人ニ示ス此僧トアルモ
角ヲ立テ著茗ヲ汲ムヲ以テ名トスル
著茗ノ湯ヲ汲ムヲ以テ名トスル
ヲ以テ称トスル花ノ色ヲ楽ム
茶ニ比ス。茶ニ酔ヒ人ノ茶ヲ
云ヒ其ノ所ヲ知ラズ

右云北銘ハ禹錫ノ陋室ニ效ヒテなもハ句シテ韻ヲ踏ミ但シ
箱ノ五文字ハフタヽ云キ花ナレハ例ニ発語ノ云イ捨ナリ
次ニ其師以下ノ句ハなも四句シテ二句ノ意ナレハ是モ禹錫カ
山水ノ四句ヲ以テ二句ノ意ナルニ效ヘリ 次ニ然ラハト返辞ヲ
置テ是ヲ韻外ノ跋語トナセハ是モ禹錫カ七子ノ結語
ニテ總テハ長ニ短ノ句法ヲ用イタル和漢ニ通用ノ文鑑ニソ
一子ノ私ナキヲ見ルニシテ去レハ其銘ノ二人トハ外面ハ箱ノ度
ニ寄セテ御食鷹ニ呼ルヘ縁語ナカラ兩師ハ同財ノ名ニ呼ヒテ
其日ノ嘗敬ヲ云ルナラン清シテ松竹ノ對ナト其人ト故ニル
凡流ナカラ尤若ノ心ハ分明ニメ是ヲ鏑縫ノ奇法ト称ニシ

誠ニ二篇ノ揖讓ヨリ師才ノ實訓ヲ感スヘキヤ但シ裏里
ハ大鴻氏ニシテ蒲ノ倉數ノ產ナリトヲ

旅硯銘　　相尤角

ものゝ花ぶのゝれと黙してをれはそれはそれおもしろ。
ものゝ種黒の勢力と字して自ら味ひたる風を。

雲板　　雲ゝれいおもしろ
　　源一平のあり。

右云北銘モ但シ一体ナリ筆墨ノ二ナヨリ龍虎ノ容ニ
寄セテ月花ノ一對ハ旅ノ風情ト見ルニシテ然ルニ序詞ノ

四句ニ韻ナルヲ後ノ銘誥ニ云イツケタル是ヲモ首尾ノ韻
ニシテ法格ハ千變一ノ態ナランカ

古硯ノ銘 并序

東花坊

いにしへ硯ありけるの硯は大石内蔵介のおもはれし播州
の人なれば、ことに其の播州の人々をしのぶよしにて硯
のむかしの武功をといふは今は此世の鏡にもてはやされて云
ところなれば、むかしにしへしてうやむかしなげきそして銘して
文なるやらんむかし赤穂の鏡の池とかやきく馬の上
硯筆をともなひて其の名は此の風流をしのびまたほとりにまいらせてうかんや

麾下に四十余人もおなじく文武の其の角ヶ風雅と沙汰して
あつく文武ならぬもにならぬ人名は残しむかしはなかゝるを名残
ものがたりにて今ぞ浦にてとしていまへもやはりかはりや
硯の名は此世に残してもなんしてはいつの名にしてかはりて遊ん
と今までその人は其の硯も世の功名とを主として名を残す
て此国の浦の風月にあそびていて花鳥を伴ふも
かなひて此の人と西湖にもいひけりしや

硯もむかしつかひなれし風雅のみちなれば
ふかくしく。硯もつかひ其の名も残し　いにしへの
なやみなんとすてゝ。あるとき人まれなる其の

中たゝに蕾のとゝのこれあれて次の所き
とひとゝ[illegible]。あるとき郷のあるきゝ居る
郷の浸とゝ[illegible]て忠義の人れきゝ[illegible]
ゝ。居たる此[illegible]居れんとゝ思ハ[illegible]
の舟ゝゝ[illegible]む。

往云此銘モ長短ノ句法ナカラ五章ニシテ十二句ナハ中ノ二章
ハ六句ニシテ二韻ナリ是ヲ首尾ノ韻ノ定法ト立ツシ前ニハ
第第銘ニ古法ヲ守リ後ニハ古欠銘ニ新格ヲ用イタル
此等ニ文鑑ノ公論ヲ知ルヘシ但シ此題ハ君子西ヵ銘ニ
效ヘル彼カ銘ヒノ六句ニモ尤モ六韻ノ論ハ有ナカラ例ニ

渓韻ノ作法ハ貴東ナレ共ハ君舟臣水ハ身観政要ノ詞
ヨリ總テ文武ノ兩用ヲ云ヘルニ花ノ木陰ハ忠度ノ歌ヲ含ム
馬上ノ和ハ曹操ノ詩ヲ寄セテ和漢ノ文武ニ和漢ノ詩ヲ
ヲ對セル誠ニ文筆ノ神ニシテ博知自在ニ驚ク可シ此ハ
大石ヵ忠節ハ文苑武林ニ名ヲ称シテ古今事例ノ武士ハ
或ハ生前ノ文書ヲ弊ヒ或ハ死後ノ調度ヲ求テ心アル人
ハ秘蔵セリトヲ但シ播東ハ二國ニ住ス素生ハ播州ノ人ナリトヲ

不血銘

[illegible]

信濃

ほんとや。

扨云佃銘ハ經簡ニシテ韻ヲ用ルニ奇法アリ去ハ古人ノ詞ヲ借ツテ今人ノ議ニ取合セタルハ玄モ一章ニ句ナルニ似テ二句二韻ナルヨリ見ルベシ況ヤ月花ニ昼夜ヲ對セル看迷ニ自在ノ人ナルヲヤ爰ニ百十夜八トハ世ニ亞ノ議ニ昼八十方ニ酒ヲ盛ルベク夜ハ八方ニトハ云ハヤリ但シ此外ノ銘類モ條朝ニ菅ニ品ヲ紀納ニ言ヤト種々ノ體格ヲ具合スベシ

市名文鑑第九

目記類

芭蕉翁終焉記　　庚午紀行

自筆終焉記

碑文類

雙林寺假名碑銘　　圖司墓誌

弔文類

生身魂冬弔文　　弔許六文

四記類

芭蕉翁終焉記

晋其角

はるゝ〳〵山ゐなりの勇貧窮ありといへども世に
風雅こゝろゝや二子余人の門をあつて夷洛をこゝ貧信
をる国と孫とのゆゝしきあいうをも勤修志しにたれ
天和の比るんら武江の芭蕉庵急火の難にかこまれ潮いさる
門とかゝげて煙の中にたちのいりむせをの花のたゝあるを
らしめあるや爰に痛如出家の妻とたちより應無所住の
んとをふつてこゝ次のゝを甲斐の山里に移とかゝ
富士の雪のゝたれふきをれいやこ更月下入無何といい

りむせらしれ跡もふつゝをれいたをれくゝい姿くて焼糸
の比るよこ居とむをひもりゝんとゝむ伊ゝと一株の
芭蕉と植をてやゝゝみるこ為とゆねといふのせをたの
門のはてふれゝ人いとのつゝゝ芭蕉のゝ為ゝ味ふゝ沈こ
国員等の大巓和尚とゝ易をくゝ九おつゝるに
あゝ門けるのゝ卦とこて華とゝ卦こあゝれゝ
をを一すゝれ爰の風こ吟れ爰こ為ゝ卦こあゝれてゝをゝれ
のゝをけゝれこ金けれふくゝからゝして世こあゝをに
ををゝゝゝけれををこあつゝるこゝみてこを弟ゝひを
ふんとをれゝゝかゝるゝこゝるゝけゝいてんとやを

さらはるゝ事ゝ体や事典の語に感じてかの草庵に
入まゐらんくのゝ人とをもふひとしつゝ
かくて貞享のすゑ秋ちかなやうゝの奥
にきこえれいんの人庵とおもはるゝてこゝにとゞまれ
つゝそもゝくの人のこゝろふれゝうの事の十性さいの不性
きあつれて風雅ゝ分と行脚の風ふかいもてそのゝの
主西にひくゝうゝ水ゝ西風の仰ゝて作きまる禅と
なりて仰頂和尚に嗣法もてゝゝ同禅の法印と
いれ一氣鉄鑄生といつゝいきわいふゝ色分もゝし
ゝ向ゝ花かゝいうゝ清やかて自然山水集

の骨髄とえられゝる海と詩ゝの社よりゝ貞享
ゝくゝあゝくゝ西海の酒ゝ落しゝ一の一ゝゝゝんむい
象深ゝ能因あゝ本ゝゝ異好あゝ二人ゝ西ゝ
ゝ四ゝ京蓮ゝ郷の宗祇宇長ゝ川ゝ
ゝ異我のゝ庵あゝていゝれゝ世ゝの人ゝ行脚
のゝゝゝ行ゝ行ゝ西ゝくゝゝてゝれゝむゝ世の
ゝゝゝゝ慈鎮和尚の旅の世ゝゝ旅ね
ゝゝゝゝゝゝれゝの境界ゝゝあゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ海の名所ゝ世郷
ゝゝゝ貞享のゝ星ゝかゝれゝゝ南素

とうかくひ給ふにはさんあるへにてんをやしはの国
ふる人にすねれてなとさりみつれの後あつかとせらに
そひえおほつるも御にし祖神のそしあるーしけるき
長月の晦日のちかよう池痢の労にまうされぬしておよ
ちらりふくはあしもこちりわりやさんあちやとあつかる
人くの中にも吉来女帥を給ちまうて別本ざいい大伴
ちまうる膳部の正清も軍は田の手由り文右惟然い
ひそりけることにあるてとめく對馬の倭給をはくし
父は信濃ふるい社の子すも國さうるほとも切らい社の文こし
もてくれきうんかくても本意ちきをちちるむ花朝やて

の扉とざしはてむしろなかのねい人うりあうやさあらぬ侍れい
其角をあるへにはそされて和泉の淡(タン)の輪とふ所り
吹井の浦の浦にはふひして十一日の中に金剛沖はまで
なそ程のりはやつね給ひにかくふやとみしおかきてと
いへをみひらけて膽は待れてその病床にうかてひとり
けると此の朱あさとのわつに力ふよれ此詞とかりて
のこあり今ら年比の心さしもかすひ侍言の神のひよ
ほふかやとかりうれしくかり奇し侍て十二月の中の
はいう花朝うるうしく眺れると朝として此世此
いきしきことてわうん人くあうれうるちらりよき記

ひてうゑ長柱とおさあり高人の身をよそおうて
川船とかよ平さてうにれ〜ばくものすくあるる
手下と池さむこ旅屋楽をあれ〜とそれ〜ふよ
雪深とはよやよ称ふし歓法もそ〜〜の心て
ふこうの日こうのそれりしき言のそふむ川やーおねと
かくこうて仏法のひうりてうしふいあるふ人のうぬを
ちうふへきさけふときふのむ〜ねうとふりね
りや仏法のかい仮しを遠く郷のちねのちねを
てかくあらきふふうあ〜ゆてかくはう
ふんと一おもたひてあるふうれはとふいけくの

たのあるねうい此朝よありわ人のあるをそうをひわ
いくうくをやはてしもうるよはあ録をかうへて仏ん
はたの書のをふれまり湖南の義仲寺と宿と敷て
近里遠境のわと仏ふるへたきねうはうるをもあり
おうをこ百余人あるへし墓を本ふ厨の塚をとあり
てとのふ〜ちひうう柳もあれとかわてち塚正ふのちふり
あるやをたをこと野面の世、経塔とをれひあ〜はと
ふうをし〜みく花の芭蕉と植てたの人の記念とふうち
をり宗をて不をたふうふ心や言ねの宗をちうれい
塚のさ〜波も変をこもて傳りふねも紀念の宗ふり

あるまでも樵路の廉田家の書きて(て)湖上の月を映て
けり家ぶの風流なるあれい遺骨も永くけれ花を狂ん
ちりぬるもちりぬるもろともにさかりも遠く風のさそふ
師匠とまてしたへいるるけ記とりて迎西の侍とも(て)
狂云此記ハ粘尾花ト云フ集ニ在リテ今ノ文トハ増減所
アリ去ルハ獅子庵ノ遺稿ヲ見ルニ元禄乙亥ノ春カ武江ニ
斧師ト対論アリテ其後ハ書通ニ増減セシヤ増合ノ書
ニ此支アリ如モ花実ノ評論ト見ヘタリ
去レハ天和ノ急ヤヨリ故云羽ノ生涯ヲ尽ヘセルニ本ヨリ
大巍ノ易ニ泥ニスル況ヤ仏頂ノ禅ニ撓サル風雅角寂ノ

身ニ行ヒ俳諧ノ西落ヲ意ニ求メル其ノ師ノ本懐ヲ尽サス
ト云支ナク其師ノ遺命ヲ傳ヘストヽ云支ナシ誠ニ此道ニ
其ノ羽アリテ其ノ云羽ニ汁男子ハルヲヤ或ハ能因西行歌
イサヤヽト幻ニ誘ヒヌラン終生ノ文ノ奇絶ニシテ眠ルヲ明ル
息タヘヌトハ終生ノ詞ノ文鑑ト云ヘシ増シテ舟ノ夜ノ長ナル
落月ノ霜モ其ノ夜ノ明ヲカナランカ然ルヲ此記ノ遺云ヲ云ハ
湖上ノ風景ヲ朝ニ則キ寄セテ寂室和尚ノ風流ヨリ骨モ
清カラントヽ結語セル業陣ニ風雅ノ服アリテ古来稀ナ
ニヱ記セサル所ナランハ又二芭子カ筆カヲ知リテ我門ニ
此作アリト感スヘシ但シ此記ハ元禄甲戌ノ冬ナリ

庚午紀行

風四維坊

百骸九竅の中に物あり かりに名つけて風と為す
その源をたずねれば 風に附れやすし 是 造化の作なり
ふるやあん彼を化自とみなすひとし 地を源
のごとくにしてあり 附いて僑んで故郷をむるとそひ
あらず附いてもしてくにかくんるとふれしのそ水や臓
中にもてひてそのあり方やもてもてくあり方と
ほんすと称するくもそのようにそれはんてそのるもと
ひとさんすとろくともそのようにふれん高ひの

和尚おのるる宗祇の連歌にあるる雪舟の絵なる
利休の茶におのるるもその無をもるれい造化にちうひて附
風雅におのるるもれい造化にちうひて附とるるて
ふるるあるるるの傳のひにあるる附いる夷狄にひく
そのんのひにあるるる附いる歌する類にて夷狄と
おるし鳥獣とるるれ造化にちうひて造化にかれ
とあり所に比を形せ月のたるのるるにちるる
月を風雅のけ出あるるんにて
旅人と称るんにられんみ くれ

ある人を語らひ給ふ事ありき　ある人をもて
とたくさてかの三月の糧とあつむるに一枚のちらしと
いれて弾正綿（ヌワコ）かるとつかの帷子もとつかのあ
きてんくしちらりたるとひて手に取の宮音といふ
あるを小船に指さしてふる壁くやうきをいふ所と
指くに乗りて川岸を祝ひとおもむけるいはあ人へ
の言葉をもて仕へ奉りたるもく
道記とかはを貫之長門守にて阿波の尼のもと
なるに帰とたくてたうり給ふ事体に似るもひ
てたの糟粕とあるにむかるあさつまりて成智

短才のるよ尽をもて（くもいのたをたのをるの屋ふり
時てたとこよりあるかこよりあり所もてふく
おちいられと莫奇薄新のそくひこのもいたに
つるるおられるれとれもたのふくの風系いたの所の
んこおるる山鼓野辛北そくしたもかいたをれしの往
とあるりの中とのもるひふりて言れるあくた
ものあ行るに為ふるれ猛結こひくいれる人
の譫言こそくて人もこそ聽セよかそむさ吹
のみて拙こ崇根吳病を重も物ふ病て遠にふり
三川といふりいらこ清とてふる社国の歩樓をふひ

ていふもたゞ濃尾張のかたにまよはんとして

旅ねしてみしやうき世の煤はらひ

桑名より千里の川ふねに乗てむかしも東海にかけて
とよみし日永の里に馬かりて杖つき坂のほるほと
荷鞍うちかへりて馬より落ぬ

歩行ならば杖つき坂を落馬かな

と物うさのあまりかくいひ出侍れど終に季の詞いらず今
よりみれば雑の句もきこえたれども伊賀の古里に
年は暮とて

旧里や臍の緒に泣としの暮

弥生なかばすぐる程ぞそゞろにうきたつ心の花の
我を道びく枝折となりて吉野の花におもひ立んと
するにかのいらこ崎にちぎりをきし人のいせにて旅寝の
あはれをも見かつは我ために童子となりて
道のたよりにもならんとみづから万菊丸となのる
誠にわらべらしき名のさまいと興ありいでや首途のたはぶれ
ことせんと笠のうちに落書す

乾坤無住同行二人

よし野にて桜見せうぞ檜の木笠　風羅坊

よし野にて我も見せうぞ檜の木笠　万菊丸

せよいふ歳頭の椿とやらん宗鑑が句法をたゞやはらかに見て
未青のそてふれなれなれしにて旅の身をおもはゞ人
ろのあとのさりあれにし抽こゝにそこひ拾されし物の料に
と詠ぢえたり硯箱世務と昼餉やうの物はさりたるを
てねよとおひかへるにわしくとねよげく力なき男の端
にひとしやまつりろさうにもくそえてやすと拙かるゆゑのあらず句なり
とどひれておはする比や柳のかど

葛城山

高くとしむる雨に詠りか朝

瞬峠

雨やれば月はもりてやまとちの峠に
晋明の心さゝことにとまりて山の端の近くれのきりしまよ
むかひまは月の月のあはれあまさやかしくほやうり朧に
こゝにてあかる揺章公の心ちやすみとそのあるは西行の
桜折よせまでひかの見空にほそくしてあらり拾つるに
今そといふむ言葉もなくていとつてゐことそのちるは
口加しそうひそとの風流いうやくかくれて寛さいるかで
はかなき奥のあらなるも

高野山

ちるも此名きる事杏し 雑よみ

和泉浦

いまとなりては和泉の浦にて遊なるう
なれらうを和泉の浦にたづねはの国をいりて須戸
の名のうらさびしさはふかけれ中比の宮もおはしまして
うらわの月をいつくしき歌あるうをみてをくるを
てはるる峰の白雲をはのかなたにうちこし
上はいとおもしろきをあらしの音あらくあいて漁人の舟
ちらよきーのむもきそしくうんさしたるかの玉川を
おもくうらんくかるうたのゆーさるやあん
雲の紅葉をうんくれるやうのを

それ須戸西須戸あり須戸をいひていけるいにはあ
ることはてあるうちうたんもうんもて屋敷をん
はあれて今をかるうたるうちとも
尺をて須戸きさごとあるーて高砂のうを
ちーちーきると彩の船をたるこれをとる
てうとてわるをて雲のうたるうもえたりーや
古歌坂の名所とうるをかるうをるやとて
たるおるくむーけ白ふしを海上須戸あーのたの船
ををひるうるれるいるきうる海中のあるたるうを
やうるを今をやをるーの中をうるとかるうて人の世

半むしもえうなりしや
かくばかり角田川とけよ浮あり

但此記ハ元禄ノ庚午ナラシカ世ニ傳ルモ多ケレ或ハ乙丑紀行
トモ云ヘル其ノ紀ハ貞享二年ノ秋ナルヘシ去ルヲ武江ノ芭蕉ニ庵ニテ
紀行ヲ取捨シ玉ヘルハ元禄ノ辛未ト見ヘタレハ両紀ノ文法ヲ取
合セテ此一篇ヲ成セリト見ユ去レトモ故翁ノ取捨シ文章ノ反故
ニシテ幻住庵ノ跡ト記シ上ニ二通ノ違イアル如ク幾度モ取捨シ
玉ヘルヲ人ハ秘蔵シテ相傳フル故ナリ見ル人ハ去レトモ点換スヘシ
去レハ此紀行ノ婉麗ナル是ヲ詩哥ノ人モ称シ是ヲ連俳ノ為ニ依ニ

学ビシ去ルハ吉野ノ花ニ至リテ一唱一手ノ作ヲナサス画ノ図ツノ二子ニ
筆ヲ絶タル是ヲ文章ノ畢竟ニシテ是ヲ文章ノ起結ト
云ハスヤ然モ我師ノ碑文ニモ此等ノ奥義ヲ云ヘルナラン或ハ名所
ニ雑ノ句ノ古文ハ蕉門ノ武用ニ證句アリテ蝸牛ノ句ハ雑体ニ
云ヘル或ハ猿面ノ類ナラン古傳 但シ此記ニ用ル所ノ故事古語
ナト数多アル中ニ吉野ニ拵章ノ二子ハ誰ニカアラン知ラズ
或ハ季ト見タルモアリ然モ詩カ哥ノ作者ナラン然レハ此説
ノ結文ハ蝸牛ノ句ニ取捨テ其ノ終リヲ調ヘナルモ先ハ紀行
ノ模様ナカラ五十年ノ重觴ノ争イヲ寄セテ漂泊六十帖ノ
栄落ヨリ人間一世ノ夢幻ヲ觀シタル例ニ一篇ノ骨節ニメ

近ク紀行ノ文鑑トスベキハ相国ハ故西行ノ愛才ナルニ不幸
短命ノ歌アリト故西行ノ名文ニ景玉ヘリ素生ハ尾城ノ人ナリ
トヲ但シ此ノ命ニ因羅坊ト故西行ニ面会ナカラ其後モ
世ヲ去リ

自造終事記

東花坊

今年ハ寶永辛卯の秋ありそう東花坊ふる孫まの
記をたくりてゐるとおもてけさて世ハ八月十六日也
せう容あり名ありて富ありて貴ふかしと思ひ
ひ仰もいてさるらとかなしうそ客坊り
てんふとりのらせさに仰くてもゆさらしせし

達磨ト少林寺ト臨ト分ケテ葱嶺ニ隔ツルノ所ニ
ヲ問ヒ行国ニ一首の辛ヒとりうの所ヒてたの魂の
かとくやとてけの所ふれるのかれるやそと仰ふの意
生身ニも権右の不思議ヒてふるふしけれ隠峯
の唯服立忘とあさむおてけうの自ニ立て仕ヒとれ
もて死ニ自在の過てたれ臨終のあれもけさらんニ
養化ヒけふふ〜橋の中ヒりやけて申ニ鈴ゆとおてニ
ふ〜いて〜世のくとあやして法とけてけふ宝あんん
けうて笙歌の中ヒ宗ヒ吾ヒの雲ヒりやんせヒ
往生のくと仏へうり滅ねくのりヒやてヒふニ

一ニよのたゆまれとゝめねをはいとゝ貴いたのふるんとく
もあ〳〵くもけせふ〳〵の高のそそ高さかられ所てあの
鉢の鉢とゝもゝ方にんけ〳〵ふ〳〵はたゝ〳〵はたゝやらは
の二色蓋十切名の間ゝなとゝて西施と五湖ゝあゝて
ゝんを九ゝをひかれゝ周ゝ名聊ゝをいふ〳〵れい
書ゝれ丘ゝをいて〳〵ふ〳〵や他ゝ西施ゝ色ゝて〳〵
名のゝけふゝさゝふんゝ色蓋の二ゝよいたゝ今ゝ
やゝて好名のゝのゝとゝてふはゝけゝをゝ〳〵かく
ゝゝ玉ありてゝゝを美惡の鑑ゝゝとゝる色
ゝゝとゝ鉢あのゝゝをゝけてゝゝゝゝて所

とゝゝゝゝんのゝのゝゝゝゝ

あるかゝとさまたゝて所ゝ世間の一句ゝ四とゝちゝ
三年に寛永の庚寅にして歳の老の四十六なる也
ゝれを生涯の俳諧の改革とゝりて所ゝ初て行者の指と
なるべきゝ百世の先と言まゝて所ゝ俳諧とて
人ゝ説ゝに所を一ゝ二ゝ所をとゝゝぶて風雅風情の
二論より新古の差別とあゝゝゝ俳ゝ極あゝて極ゝ
論あゝゝゝゝゝゝ論を自他の好悪とあゝゝて
世の学近ゝ日をひゝよたの比の学をゝ咬神ゝゝ
ゝゝ弟子のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝるの時ゝん何ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

弟子をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
古今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
二月十二日の洛のゝ林寺ゝ俳名の碑と云て所義の意
忘のゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ跡ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
俳諧の変化をもちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
西華坊もおゝく卿ゝ庵もゝゝく野盤ゝゝゝく俳諧を
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

句ニ市ノ人ハそもゝ作ル人ノ風姿ヲ以テ風情あれ
ヨ義の下枝のそもやふゝん萩の上葉のそもやふゝん
のこれのたれくゝとそ青の月をけ世のうゝてゝ
仮名帋記ハ芦周ヵ齊物ヲ題トシテ題名ハ但シ仏偏中ノ詞ヲ
去ルハ起文ニ容名ノ二字ヨリ容アリテ名ナキ物トハ是ヲ終ヲ
意トシテノ有ルハ人ハ名ヲ即破スヘシ去レハ仏偏ノ故ヲ古語ニ
例ニ和漢ノ自在ナカラ葛山嶺ノ對ノ新奇ナランヨリ花鳥ニ
雪水ノ對ハ誠ニ世ノ偏ノ骨ノ節ニシテ我師ノ本情ハ此ニ句
ニ見徹スヘシ或ハ水ノ鮭トハ在中将ノ奇アリテ立圓ノ名ヲ
ヲ西行ノ奇ト取合セタル是モ双関ノ法トヤ云ハン增シテヤ鳥ニ

佳語ノ古奇ヲウケ侘語ニ和奇ノ名目ヲウケタル全ク双関ノ
文法ト知ヘシ或ハ鳥蛙ノ句評トハ我師ニ発悟ノ故アリテ
湖南ニ曲翠亭ノ夜話ナルヨシ先ニ陳情表ニ世良アリ或ハ
芳野山ノ句トハ庚寅紀行ノ芳野部ニ「奇書ヨリモ軍書
ニ悲シ芳野山ト云ハ我師ノ雑ノ句ニ隠主翠門ト雑陳ノ詞アリ
テ故ニ羽ニ芳野ノ発句ナキ故ヲ羽セリ或ハ風姿風情ノ論ハ先
ニハ葛ノ松原ヲ撰シテ後ニ續五論ノ拾書遺アリ總テ雅諧ハ
理論ナリ或ハ今ノ二一經トハ我門ノ五條ヲ註シテ一句ニ六句
ノ姿情ヲ附ケテ六巻ヲ一奇仙ニ陶合セタルハ度ノ変化ヲ
云ヘルナリ但シ狐ノ庵ノ遺稿ニ在リテ書肆ニ山ヲス然レハ仏偏

結文ニハ諸法皆空ノ所ヨリ服ニ六秋ノ色ヲトヽメ耳ニハ六秋ノ音ヲ
残セル是ヲ仏教ノ生滅自在ニ云テ是ヲ文通ノ死活自在ト
云ヘシ但シ結語ハ人丸ノ哀サカラ辞世ノ詞ヲ借ルベキ也

碑文類

芭蕉翁石碑記　并序　　東華坊

我師ハ伊賀ノ国ニ生レテ兼應ノ比ヒ藤堂ノ家
ニ仕ヘ其ノ主ヲ松尾ノ堂ニ葬リ今ノ世ヲ松尾
ノ翁ト年ヲ経テ武陵ノ深川ニ
世ヲノガレテ世ニ芭蕉庵ノ名ヲ人ノ呼テ
ヲ名ヲ作ニ成テ今ノ事ヲ記ス

仏諸ヲあなひて此碑の後ヒ来ル人ヲ
松ノ下ノ苔ノ露ヒ消ルヲ待ツ
ニ富士ノ雪ノ朝ヒ消ヲ待ツ
ヒ古ヒヲ慕フ人ハ
此ノ句ヲ見テ
此ノ句ヲ見テ
弟子月の半の三日ヲ
ヲ意ヲ
ノ人ヲ
ヲ形ヲ
ヲ東華坊ニ
ヲ碑ヲ作ル
ヲ孫ヲ
ヲ

甚銘

あづまさこゝ　武さしの国に　ゑうしあり
世を言葉の　ゆくえ　人をあそに
あるうち世に　言の葉いとゝ　あありて
世の玉川の　みふかくの　えのつゆ
くもりなれ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
流てを乗も　なう川や　山世とゝ
とゝ　移て　ゝ　ゝ　ゝ
川秋風乃　ゝ　ゝ　ゝ

とゝ　とゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

碑陰

狂云此碑ハ沿東ノ雙林寺ニ在リテ頃荷西行ノ墓ニナラ(ル)
但シ本朝ニ假名ノ碑ノ始ナランカ其ノ年ハ寶永庚寅ノ春ナリ
去レハ此銘ハ三十一句アリテ起結ニ假名ノ韵ヲ用ルニ中間ノ
十二句ハ七字ノ謎(ナゾ)ニシテ其ノ三句ニモ首尾ノ約アリ然レハ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

維石不言
謎文以傳

序詞ノ故実古語ヨリ或ハ故翁ノ行状モ或ハ石碑ニ誌文格モ
或ハ其ノ銘ノ助語頌辞モ此等ニ一軸ノ秘任ヲ加テ彼ノ
内陣ニ奉納スモ亦モ世ノ識文ニシテ多ニ註スルニ恐アランカ
但シ発語ハ我師カト清テ讀ムシ論語ニ多ク和歌ハ五道
ハト云ル人ヲ呼カケメル語勢カナリト

圖司墓誌 并序　野盤子

むかしの國の人の種族と圖司ふるとしてのちの人のかた
とゆゝかりて三十月の中比より旅立て此の月
山橋の宿りにて武の芦屋庵

ゆくえしらずくれの名ばかりとなりて居の松のかげ
ふるさとの夢のやうにて夢とさめなのまもふさま
ふんちりちりわけのもとうれあるさまの奥も
又ふるさとと今よりはくさひとしるよむ月の末
やうにはたらけて何のあるとはいはてまきはたらは
二日ありて孫子ゆくらはせれは山部ヶ
へきよはへありて書ふみとあくてはりてのうるさ
はきよみとよ山使さとせうこいえやくとあむこうね
申しはてやうはをあ所人のかりまき
ふるとと今を作くしるあうへなのひそとかけ

くゝあられ多くよ面いおわるゝ所を流さるゝ
ゝ雲とあられむとつくまして世文の言情ふるむ
所を阿弟ゝくゝ[illegible]れて世ゝ房ふの香華とたくく
ゝとゝ〳〵經ゝゝゝと[illegible]して墓誌の情とたゝゝ

當時よりあられを塚のもとれゝよ　芭蕉庵

厚一ねいゝゝゝ　西行堂

死ゝゝ来てたのゝさたゝゝゝのもの　野盤子

仏ゝ墓誌ハ文體ニモ論アリ花生年月ノ〻ヲ誌シテ銘文
ノ類トハ異ナリトヒエ上ト今ハ任勝カ墓誌ニ效ヘルヤ序詞
ノ外ニ詩文ヲ出セリむモ後部アハ（キナリ去ハ誌文ノ之ニ準ハ

當時ニハ孟遲カ詩ヲ人々口ニ花陰ニ西行ノ筆ヲ摘ミテ西ニ遷堂
カ鳥ハ頓挫ノ格ト云ヘレ何レモ伊ヨノ口授アリテ故ニ翁ノ及文ヲ
世論アリ但シ蜀司ハ其ノ姓ニシテ名ハ呂九ト云ヘル出羽国ノ郷侍ナリトヤ

弔文類

生身魂祭文

北七里

むりを維摩のまゝとゝゝていセの法華経とゝゝ
今をその浦の江鮒とゝひて二人の貴走ゝゝゝ
ゝゝゝそれとせのの人をゝゝゝゝゝゝゝゝ
唐人とせをて名去ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
長陳尾張ゝいだゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いふ所の一物多くあるべし其名いろいろ也
さらに今年いせ鯉のえびをて一丈の龍と化し
なりたるのはらんこの人のいとなみわたりやすく一寸
ばかりて其名とあらはるゝ其形ちゝゝにして
るゝなり意の所ゝとをつねて一流の業と志と通ず
かつ一なの恩とをりてこゝにより金の光とたゝふへ
ばれて生涯の魂の刺鯖(サレサバ)をよりて雖然に新のゝとや
みゝん伊勢入道貴達のゝとやゝみゝん驚の宮の辛崎
をゝゝ龍とみるゝ偽物とをゝまれ世をゝゝふれゝ
麗尾(ミツハキ)ゝの枝とをりて一滴の水とたゝくゝり西南

をゝ一筆のをゝをりて弥彦(ヒコ)の峯をゝ弥ひゝ
みよの風あれて二麻本の空れ心かゝ行し屠空をゝ吹
ちゝをゝゝれゝあゝかゝまれ

往云件叅文八比体ニシテ中ニ兩箇ノ隠名アリ最尭俳勢
ノ国ニ龍ノ一字ニ留メルノ謂リ去レハ其魚ノ多名ナル
芦荻ノ二字ニ語ヲ起シテ古云ヲ用ルニ自在ノ所ナラン或ハ
鯨ノ字兜跋ト八越後路ノ濱ニ数多アリテ寄鯨ノ弔ヒ
トヽ或ハ弥彦(ヒコ)ヽ云ヒモ越後ノ高山ヨリ発ル三ヶ師ト云ハ先ニ
彼カ鑑亨三年我師トシ吟ノ寄仙ニ同作ノ花二本アリテ
二句同意ノ秋授アリシヨシ其花ヲ指シテ一ヶトハ云ルナラン

ゆもつ篇八唐詩なんニ似タレト気ニ入ノ思ヲ忘レス刺鯖ニ
寄セテハ生見鯉ノ意ヲ結ヒ鮮ノ幸兜使サニハ奎文ノ趣ヲ
顕ハス誠ニ七縱八横ノ体ナリ但シ此段ハ戎師ノ千名ヲ鄙破スニシ

弔許六文

彼新和
江東の許六は風雅の大剛の男にて芳塚に俳諸の
義をひらかんと詞林をみ幸の斧をとりて
天下の俳士を訪ひ給ふに俳諸檀上なりの印をと
鉄心石肝の大将とて万人を以病ひ
ひ給ふ事をあやまりこれ一の秋の月

孤ニ方ヒ給ふ誠ニ俳門の四哲とかりて
ありしに文雅ある也むしろ武陵の芭蕉庵に
あそひて業門の別ニ此のなむけ俳諸をとり
きるも師のるいをあひ伴ふんとなるの称
あるこしらやを盃とよくく書とよくく
武義とよくくて多能ニ人なるに一芸を
盃耶観の本由となくく反村未なまと兩翼ニ
ゐ篇の俳書とあいをるに邱墟ニ甚角ニ作と
洛陽ニ吉素ニ實とくおて俳諸往来ニうつる秘ニ
あるを作らるを師門の作ニ作とつるなんもうに

和師ハ如何ナル方ノ人ニテ和師ハ作意
ノ法ヲ知ルヲ人ニ作ラセタルヲ作ルヲ作ルヲ其人ヲ
作ルヲノ作ルヲ作レトナリ其人ヲ
ヲ作ルヲ作レトナリ其人ヲ作ルヲ作ルヲ
ヲ作ルヲ作レトナリ其人ヲ作ルヲ作ルヲ
非作ト云ヒ作ルヲ作ルヲ作ルヲ和師ヲ作ルヲ人ノ心ヲ
作ルヲノ何ヲ言語ノ作ト作ト云ヒ作ルヲ深ク
五老井ノ俳書ヲ作ルヲ集ヲ云ヒ天下ノ人ハ
凡角ヲ作ルヲ終ニ人ヲ作ルヲ和師モ
ナノ中ニ一人ヲ作ルヲ面ノ世情ヲ
ヲ作レテ和ヲ作ルヲ作ルヲ作ルヲ

来ル人選ノ選ノ論アリテ筆陣ノ論ヲ是ヲ
論ヲ作ルヲ和師ヲ作ルヲ秋ノ作ルヲ作ルヲ其人ヲ
此秋ノ作ルヲ作ルヲ俳諧ノ論ヲ二世ノ唐ノ作ル
ヲ作ルヲ文章ノ作ルヲ面ノ作ノ面ノ作ルヲ其人ヲ
和師ヲ敵ヲ作ルヲ和師ヲ作ルヲ其人ヲ作ル
ヤ和ヲ作ルヲ作ルヲ作ルヲ選場ノ結ヲ作ル

往云此篇ヲ一部ノ結文トハ先師カワテ選文選ヲ思イ立テ
終ニ其ノ成ラスシテ今ヲ三文鑑ヲ選スルハ物ニ其人ノ名ニ
觸レキヲ今ヤ此選ノ半端ニ到リテ其人ヲ失ルカ又ハ情モ
尚惜ムヘキ故ニ今然レハ一篇ノ趣ハ始ニハ韓信カ將壇ノ男

ニ喩ヘ次ハ陶晃カ胡床ノ疾ヲ歎ク總テハ文武ノ才能ヲ称ノ是ヲ一ツ宛ノ趣意ト成セル非心非仰ハ斬伐ノ骨節ト知ルヘシ去レハ文選ノ異論トハ才一三文章ノ虛實ヨリ或ハ假名真名ノ配リヲ云イ或ハ句讀ノ長短ヲ云イ或ハ和漢法格ヲ云イ或ハ韵字ノ位置ヲ云イ或ハ辭類ノ差イヲ云イ或ハ文類ノ誤リヲ云イ或ハ列傳ニ人ノ優劣ヲ云ル總テ書面ノ贈答ニノ本ヨリ秋宗ノ道ヲ行フル其ノ角ヒノ風雅ナラン三人ハ敦亡虫ノ例ヲ世ニ文章ノ法格ヲ知ラス知テ用イサル時ノ師範タラン其人ハ未ダ門牢ニシテ摽号ヲ西中ト云イ別荘ヲ五老井ト云フ第阿仲ハ法名ナリトフ

なかのあそん

往序

たらちかくのこゝとあむけてふんい数ゝ也と題とあまたゝこゝろの指ゝやまとたましいはうのうちのぞゝろあゝて古今のふみ章の大綱ときゝんゝ言と和漢のふみ跡ともてゝしゝ中ゝにあり句格あゝて其名を漢文もあゝゝのねゝとゝとゝのゝ語とゝゝ今ゝゝ彼名の用とふゝれゝ言とゝ称るのふ往ゝふ年ゝゝて五ケ條の式用いふ言葉のゆゝたちにふう

渡五仲

傾人と云ふこの配を奇人連言の用とそふれて軍を
伴記の作ふる言と結びの文法をもつて一一はて
なるの詩とはくらなるの辭とあるさもるる詩を
文類のかくもしよ引して和漢よみ集の歌とあるれ
ふ章の人は法もとつてふく辭を人偏のる昇とる
てよ矢を作文あるのあやとあるといふ章の人は賓節
ふんるる詩をふ程の数るして辭をふ程の意と
ふ一はるなるの文章として作年秩序地儀て
程る部を面旅ヨハナレるて書をして仲ふ文粹
いる漢文ふるとやはるるふ集のえあんるも

年に集八音をふかるふよ拾遺集八部んとるる
ちるたなるの文程とはるるふ程ふる
さるとは和ふ文をるるもあれるるるる夏ふは
ふ稼もあんとをんを一方葉の假名遣より祈書
の助語をるるし或を集程あるるる軍記の
様状るも和語の文はとるるいあるるるるる
和漢文撰とるるし赤門をるるる集をんを
さるを和漢文姿情の差ふあれる数を和るして
意を漢ふんも意を和して数を漢ふんも
をるるるて作ちるの作ふんふ和るるふ章ふ

ふるしあくんんを假名文字にて長く文をもて
京師の書林よりまれにつよく新をもとめる
と言ふことも

享保戊戌隻六月上浣

相州川入
雲井
抱堂藏書

書林

江戸日本橋南二丁目
小川彦九郎
京寺町
押小路橘屋
野田治兵衛